

時事新報

衆議院にては百餘名の連署を以て家祿賞與祿處分法のものを提出したり近年來各地方の士族の中に復祿願と唱へ種々の理由を述べて藩制施行の當時に没祿しくは減祿に處せられたる其祿を元の高に復し其高に相應する公債證書を得んとして周旋運動するものある。しし層ば耳にしたる所なれども其理由は兎も角もとして今更ら復祿云々とは驚入たる沙汰にして何人も取合はざるふとと思ひの外、衆院の議員が自から其案を提山するに至りては聊か論する所なきを得ず抑も當時の事情を詳細に調べたならば種々の間違ひもありて實際に實際に考へるに可きものもあらんなれども何を云ふにも王政維新廢藩置縣は我國の大革命にして政治は勿論、社會の組織さへも根底より一變したる程なれば其間には非常の珍事も行はれて單に家祿のみならず開はれなくして生命を失ひたるものもなきに非ず今日より顧みれば亂世至極と評するの外なけれども其時の有様に於ては止むを得ざる次第にして今更ら不平を訴ふるは愚なりと云ふ可し或は維新初々の時季は兎も角も明治三年藩制施行の後は天下の政權全く中央に歸して一切の責任は政府に於て知る可き筈なれば復祿の請求は至當なりと云はんかなれども藩制の施行から明治三年なれども實際に其實を擧ぐるまでは中々容易ならずして多少の日月を費したる其間に各藩に於ては銘々勝手の手心にて事態を處したるみるとなり家祿沒滅の處分の如きは大抵その際に於て知る可き筈なれば復祿の請求は地震洪水の災に二十何年後の今日に至り之を云々するとは時勢を解せざるの舉動と云はざるを得ず或は又當時の事情は兎も角もとして全國一般の士族は家祿の代りとして相當の公債證書を得たる其中に一時の間違ひより没滅の處分に遇ふて苦しめられたるは他に比して不公平なりとの説もあるらんかなれども維新の革命は地震洪水の災に等しく其災に罹りたるものは不幸の極に相違なしと雖然と覺悟して自から諦むるの外なきのみ若しも單に理窟一個よりして之を云々せんか第一に廢藩の處置の如きは最も不平の甚だしきものなれ三百年來祖先より傳へたる土地人民を沒收せられ公債證書に換へられたる其損害は非常のものなれども又更に一步を進めて考ふるも左ればとて他の災を免れたるものに比較して不平を唱ふるも實際致方なき次第なれば天災に遭ひたるものならされば本來を云へば維新の際に悉く沒收せられたる土地人民を沒收せられ公債證書に換へられたる其功名を得たるものにして其功名とは取りも直さず戦國の時代に恰も切取強盜を行ふたる其手柄に外れば大名の所領は勿論士族の家祿の如き其本を奪はれども左れどもあらんには種々の證據事情を申立てし復祿を望むもの續々輩出して際限ある可らず金額は兎も角もとして其手數だけにても實際に容易ならず甚だ財易き處にして到底實行す可らざるものなるに然るに衆院の議員が自から其族威を擧出したるは何か事情のあるべきなれども其事情は我輩の知るを要せざる所なれども畢竟其黨の嘴は國民を代表する議員の舉動に非ずとし則ち忠告を試みるものなり

雜報

○合衆國乞食の組合

○獨逸政府水雷艇破壊艦を英國に注文す  
獨逸政府は今度排水量三百噸にして卅ノットの速力  
ある水雷艇破壊艦三十艘を英國なるトルニイクロフト  
レーードトムン等の諸會社に注文せり又此外にも同  
一の水雷艇破壊艦八艘を何れにか注文せんとする云ふ  
是迄獨逸エルビングなるシカウ會社にては英國にて製  
造し得る位のものは何でも製造し得ると思ひしに今同  
政府が前記の諸會社に注文せしは英國工業家の爲めに  
祝すべきことなりとシヤバンガゼットは云へり

卷一

の其混雜の中にも絶えて混雜せぬ一定の相圖あり著書漢と馬鹿野郎との區別は勿論、其吝嗇さ具合と馬鹿さ加減即ち呉れる錢の高とを報知する通信機關あるふと覺りたり

風流詩

一定の相談あり  
客番さ具合と異  
る通信機關ある

一〇四

法律は人の惡をじよりと  
に引比べて常々言  
上手にするものだ

されし、みの後海老藏木場男之助を勤めしに如何に  
すれども、赤猿が氣が入らず、急に赤猿を思出し呼返へさう  
頭あべふべに師匠から詫を入れ勘當を免したりとは  
れもしらし。  
赤べたの役者  
七代目海老藏は平生風流なるふとを好み俳句狂歌など  
巧に物じゆ、或るどき梅花、黒猿等と一席にて、芭蕉  
の「道ばたの桜花は馬に喰れけり」の句を一つもぢりし  
て、海老藏  
道ばたの真瓜は馬に喰れけり  
と吟じたるに、梅花ふれを聞いて手前も一つとて、  
赤べたの役者は馬に成られけり  
道端のね公家は馬に乗られけり  
と云ひぬ、その時黒猿も躍起となり手前もとて。  
赤べたの役者は馬に成られけり  
と作りぬ、海老藏みの歌を事の外感心して褒美などを與  
へしと云ふ。  
白側は顕光だ。  
今晉羽屋或る旗士脚味を演せしとき、作者の幕田某  
家橋の部屋に入來り、「親方貴方顕光を爲さるのですか  
と尋ねば、家橋を振り「いや顕光は誰れが爲るか  
知らない。自個は顕光の方だと答へしにぞ幕田不思議  
相に、「さうですか私は貴方だと計り思て居ましたと云  
ひ、その足にて直や晋羽屋に至り、「親方家橋さんが  
顕光を爲ると思ひましたに、自個は顕光の方だと仰有  
いますが、开うすると顕光は何方が爲さるのですと異  
國目で言ひたるには、洗石の晋羽屋も顎を抱へて笑ひ

左れど廢人の世のなかへ、さはなし。今迄女が皆傀儡の中へ、吾は獨に強けれども、氣に眼も脚なり。されど、さらねだに、先生苦しいわ、何悪い事が有り、知れませんが。とは吾ながら能く「アラあんな事で、出ると極りが悪何夜ですもの、承約ですとも、だつて本當に苦先生が引受けて、夫は大丈夫です、を據かるのです、の男ですから、「いじや有りま  
「夫でも赤城は太  
「娘が女乾りが仕や  
「妾は亭主なんぞ